

鳥栖市文化財調査報告書第81集

田代太田古墳

史跡周辺の範囲確認調査

2010

鳥栖市教育委員会



田代太田古墳石室入口（南から）



玄室奥壁彩色壁画の現況

序

鳥栖市田代本町に所在する国史跡田代太田古墳は、彩色壁画系の装飾古墳として古くから知られる、本市を代表する遺跡の一つです。

本書は、この田代太田古墳の周辺地で平成20年度に実施した重要遺構範囲確認調査の記録をまとめた報告書です。

本書を通して郷土の文化財に対して一層のご理解をいただき、また、学術文化の向上に幾分とも寄与するものになれば幸いに存じます。

発刊にあたり、埋蔵文化財の保護に深いご理解をいただいた地権者の方々、そして発掘作業や整理作業に従事された方々に厚く御礼を申し上げます。

平成22年3月30日

鳥栖市教育委員会

教育長 檜崎光政

例 言

1. 本書は、平成 20 年度に重要遺構確認調査を実施した、鳥栖市田代本町に所在する史跡田代太田古墳の調査報告書である。
2. 発掘調査は鳥栖市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査にあたっては、土地所有者の方にご協力を頂いた。
4. 調査は、平成 20・21 年度の国宝重要文化財等保存整備費補助金および佐賀県文化財保存事業補助金を受けて実施した。
 - ・遺構実測は、中島貞子・山本美代子・平田博子・中村光子・権藤イツヨ・久山高史がおこなった。
 - ・遺構・遺物写真撮影は久山がおこなった。
5. 出土遺物の整理を含む報告書作成作業は鳥栖市牛原文化財整理室で実施した。
 - ・遺物・図面整理は松崎友子・権藤由美子がおこなった。
 - ・遺物実測は中田里美がおこなった。
 - ・図面トレースは毛利よし子・中田がおこなった。
6. 本書の執筆・編集は久山がおこなった。

凡 例

1. 本書で報告する調査地区については、昭和 50・51 年度に石室の保存工事に伴って実施された調査地区をそれぞれ 1 区、2 区とし、今回確認調査を実施した史跡西側の調査地区を 3 区、東側の調査地区を 4 区とした。
2. 方位は座標北である。

本文目次

第1章 調査の経緯と組織	1
1. 調査の経緯	1
2. 調査の組織	1
第2章 田代太田古墳について	2
1. 地理的・歴史的環境	2
2. 古墳の概要	3
第3章 調査の報告	5
1. 調査の概要	5
1. 4区の調査	5
2. 5区の調査	8
第4章 まとめ	10

挿図目次

図1 鳥栖市域の古墳時代後期首長墓系列墳の分布 (1/30,000)	2
図2 田代太田古墳石室実測図(1/60)	4
図3 田代太田古墳測量図及び試掘坑配置図 (1/400)	折り込み
図4 3区試掘坑 (1/100)	6
図5 3区試掘坑土層図 (1/60)	7
図6 3区出土埴輪片 (1/2)	8
図7 4区試掘坑 (1/100)	9

表目次

表1 3区試掘坑一覧表	5
表2 4区試掘坑一覧表	8

写真図版目次

巻頭図版 田代太田古墳石室入口 (南から) 玄室奥壁彩色壁画の現況	
図版1 1. 墳丘南東部現況 (東南から) 2. 墳丘南東現況 (北東から)	
3. 墳丘北西部現況 (北から)	

- 図版2 1. 墳丘北側平坦部分（西から） 2. 墳丘東側平坦部分（東から）
3. 墳丘北側平坦部分（北から）
- 図版3 1. 墳丘北西部現況（北西から） 2. 墳丘西側現況（西から）
- 図版4 1. No.1 トレンチ（東から） 2. No.2 トレンチ（北から） 3. 同（南西から）
- 図版5 1. 同 落ち込み部分（北から） 2. 同 3. 同（南西から）
- 図版6 1. No.3 トレンチ（北東から） 2. 同（南西から） 3. 同（北東から）
- 図版7 1. 同（北から） 2. 同（西から） 3. 同 サブトレンチ（南西から）
- 図版8 1. No.4 トレンチ（北東から） 2. 同（北から） 3. No.5 トレンチ（西から）
- 図版9 1. 同 南壁土層（北東から） 2. No.6 トレンチ（南から）
- 図版10 1. No.7 トレンチ（東から） 2. 同 西壁土層（東から）
- 図版11 1. No.8 トレンチ（東から） 2. No.9 トレンチ（南西から）
- 図版12 1. 同 北壁土層（南から） 2. No.10 トレンチ（南東から）
3. 同 西壁土層（東から）
- 図版13 1. No.11 トレンチ（北から） 2. 同（南から） 3. No.12 トレンチ（西から）
- 図版14 1. No.13 トレンチ（西から） 2. No.14 トレンチ（北東から）
3. No.3 トレンチ出土円筒埴輪

報 告 書 抄 録

ふりがな	たしろおおたこふん							
書名	田代太田古墳							
副書名	史跡周辺の範囲確認調査							
巻次								
シリーズ名	鳥栖市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第81集							
編著者名	久山高史							
編集機関	鳥栖市教育委員会							
所在地	〒841-8511 佐賀県鳥栖市宿町1118 TEL 0942 (85) 3695							
発行年月日	西暦 2010年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
田代太田古墳	佐賀県 鳥栖市	410213	-	33° 23' 42"	130° 30' 55"	20081008 ～ 20081212	約 150㎡	重要遺構 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
田代太田古墳	古墳	古墳	墳丘基盤面	円筒埴輪片		墳丘規底面に相当する基盤土層を検出		

第1章 調査の経緯と組織

1. 調査の経緯

鳥栖市田代本町太田1370番地に所在する田代太田古墳は、現在1,783㎡が国の史跡に指定されているが、実は指定の範囲が古墳の墳丘全域に及んでいない。図3でわかるとおり、特に西側部分の現況から、墳丘盛土が基底部ごと大きく削平されていることがわかる。この部分は早くに削平されており、指定当時にはすでに別の地籍であったことにもよるが、1925年（大正15）に指定された当時は壁画古墳として、石室が重要視され、墳丘の重要性は現在ほど考えられていなかったようである。

高松塚古墳壁画の劣化問題に端を発した装飾古墳の保存について世間の関心が高まりつつある中、田代太田古墳についても、壁画の保存問題について注目される機会があり、これを機会に史跡の拡大を含む古墳の保存・活用について検討を進めるよう、文化庁より指導があった。また、近年周辺の開発が顕著化しており、埋蔵文化財として周知されているところが史跡部分のみであることもあり、史跡周辺の埋蔵文化財の状況を把握して開発行為からの保護を早急に強化する必要もでてきた。

そこで、将来の史跡範囲拡大も視野に入れて、墳丘の平面的規模の把握、及び範囲を明確化させることで開発行為からの保護を強化するとともに、将来の史跡追加指定や保存整備を図る際の基礎資料を整えることを目的として、範囲確認調査を国庫補助事業で実施することとなった。

調査は、現地の発掘調査を平成20年10月8日より12月12日にかけて行い、整理ならびに調査報告書作成業務は、平成21年度事業として鳥栖市牛原文化財整理室において実施した。

2. 調査の組織

調査の組織は以下のとおりである。

事業の主体 鳥栖市 鳥栖市長 橋本康志

事務組織 鳥栖市教育委員会

総括 教育長 中尾勇二（～平成20年9月30日） 檜崎光政（平成20年10月1日～）

教育部長 松永定利（20年度） 西山八郎（21年度）

教育部次長 陣内誠一（20年度）

生涯学習課長 中島光秋

生涯学習課参事 緒方康弘（20年度） 篠原久子（21年度）

調査組織 生涯学習課文化財係

係長 石橋新次（課長補佐兼務・20年度） 久山高史（21年度 調査・報告書担当）

主査 鹿田昌宏 内野武史 鳥孝寿（21年度） 大庭敏男（21年度）

重松正道 高尾守人（20年度）

調査指導 文化庁記念物課 文化財調査官 清野孝之

現場発掘作業 長家聖一・山下重信・権藤イツヨ・中村光子・平田博子・山本美代子・中島貞子・松崎友子

室内整理作業 松崎友子・毛利よし子・権藤由美子・中田里美

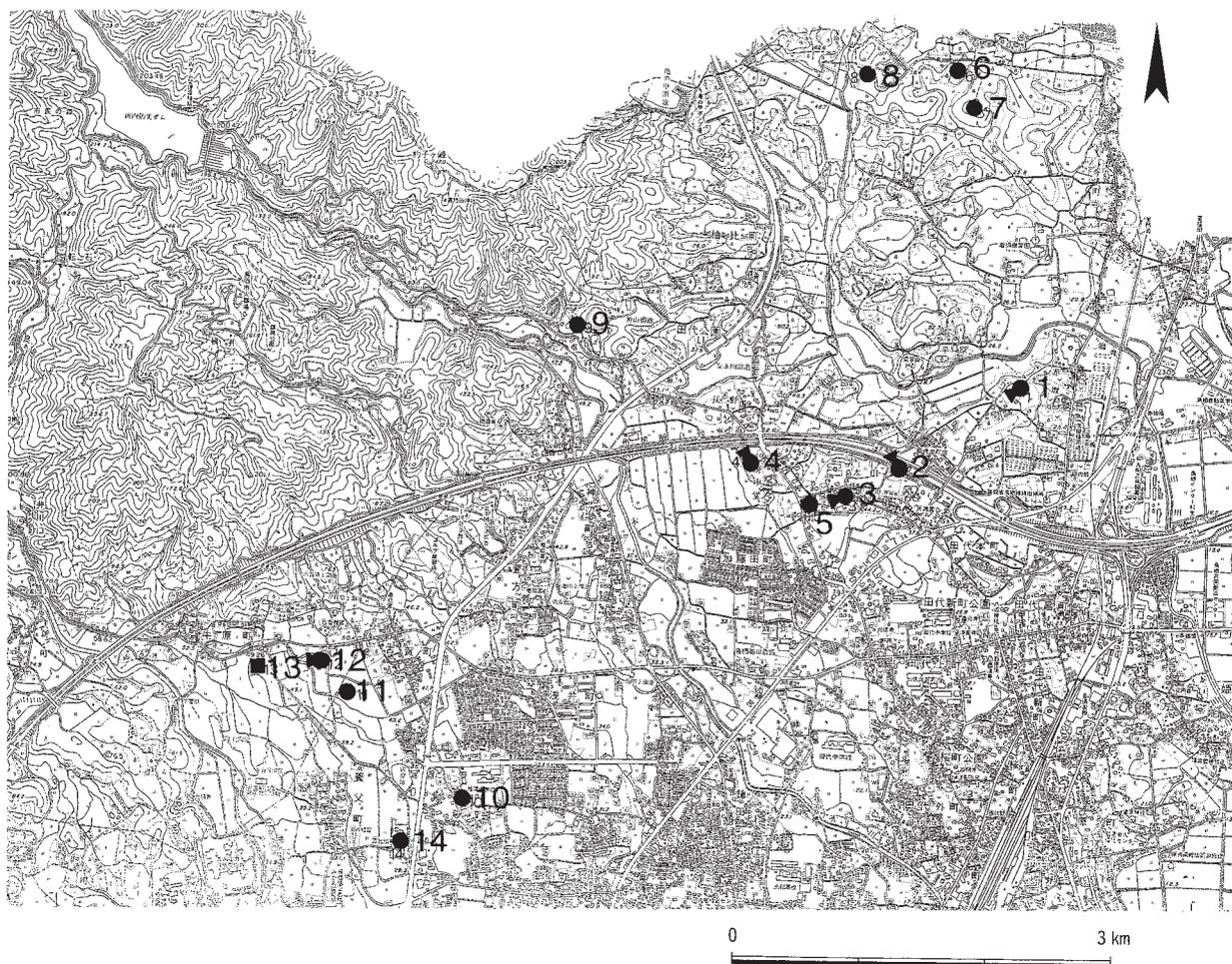
第2章 田代太田古墳について

1. 地理的・歴史的環境

佐賀県の東部に位置する鳥栖市は、筑後川流域に展開する広義の筑紫平野の一角をなすとともに、狭義の筑後平野西北部の位置にある。北は筑紫山地に限られ、南は筑後川に至る。東は筑後川に沿って福岡県小郡市から甘木・朝倉方面へと広がる平野に連続し、東北は福岡県筑紫野市方面一帯の地峡を経て福岡平野へ通じる。西部は筑紫山地より派生した丘陵地を介して佐賀平野と接する。

田代太田古墳は鳥栖市の北東部、脊振山塊の九千山（847.5m）の支嶺から東南方向に伸びる、大木川と山下川によって形成された高位段丘の縁辺部、標高約51mに立地する。この高位段丘には縄文時代から古代にかけての遺跡が集中して分布しており、柚比遺跡群と総称される。

鳥栖市域における古墳時代後期の首長墓系列古墳は、現在のところ柚比遺跡群を中心に3グループ13基が確認できるが、田代太田古墳は、40～30m級の円墳5基で構成される6世紀後半～7世紀初頭の「グループ2」の中で、最初の築造とみられる古墳である。



1. 剣塚 2. 東田 3. 庚申堂塚 4. 岡寺 5. 田伏太田 6. ハツ並金丸ST4510 7. ヒャーガンサン
8. 梅坂 9. 神山 10. 稲塚 11. 牛原原田ST06 12. 牛原原田ST05 13. 百度塚 14. 塩塚

図1 鳥栖市域の古墳時代後期首長墓系列墳の分布（1/30,000）

2. 古墳の概要

田代太田古墳は、古墳時代後期に築造された大型円墳である。彩色壁画系装飾古墳として早くから知られており、1925年（大正15）11月4日に国の史跡に指定された。

石室は遅くとも明治初期には開口しており、同20年頃に発掘されたと伝えられているが、詳細は不明である。1975・76年（昭和50・51）に、壁画を保護する目的で、石室を密閉して気温・湿度の変化を安定させる保存工事が行われたが、その際に石室床面及び墳丘・墓道の一部について調査が実施されている。（保存科学研究会 1976「田代太田古墳 調査及び保存工事報告書」鳥栖市教育委員会）

2段に築かれた墳丘は、高さが現状で約6mある。墳丘径については、現況の一段目端部から復元計測して約42mとされている。現況では一段目の幅が10m前後もある「麦わら帽子」状となっているが、墳丘斜面が削平されていることは明らかである。また、現況で径約9mを測る墳頂平坦部についても、もともとの形態であるかどうかはわからない。

内部主体は全長約9mの横穴式石室で、南に開口する。前室、中室、後室の3室構造で、後室の高さは約3mある。中室と後室の天井部分は石材が持ち送られてドーム状となるが、前室は眉石に天井石を架構するだけである。屍床は後室に3体分、中室に2体分が仕切られていることが、保存工事に先立つ調査で明らかとなっている。とくに中室については、埋土の蛍光X線分析によるカルシウムおよびリンの含有量を根拠に、埋葬の事実（木棺を使用せずに被葬者が横臥されていた）が証明されている。

前室については、天井石の状況、平面プランが前庭側壁のように手前に広がる側壁の石積み状況、中室眉石手前にもう一石羨門状に架構された横石などから、築造当初は羨道として計画されていたものが、ある段階で改造されている蓋然性が強いことを指摘できる。ただ、その改変が築造時のものなのか追葬時のものなのかは、盛土部分が未調査現況では証明する根拠を持たない。後者の場合、墳丘盛土や墳丘の平面的規模についても改変の可能性を考慮する必要がある。

装飾文様は後室奥壁と、後室と中室の間の袖石の手前部分と中室右側の壁に描かれている。壁画の彩色は、赤・黒・緑の3色の顔料に、石室材である風化した花崗岩の黄色い岩肌を加えた4色の効果を用いて描かれている。赤色顔料はベンガラ、黒色顔料は炭化物、緑色顔料は海緑石を使用している。

後室奥壁の壁画は、幅約2.3m、高さ約1.1mの腰石に、背景とし連続三角文を描き、中央部分に大小の同心円文を4個並列して、これらの間を埋めるように、花卉の内部に緑を入れた花文や、挙手人物像や騎馬人物像、蕨手文、船、高坏を配し、最下辺右側には4個の盾を並べたように描いている。

また、後室と中室の間の右側袖石には同心円文や弓を引く騎馬人物像が描かれ、左側袖石には同心円文・船に乗った人物・盾・高坏らしいものが、中室の右側壁にはいわゆるゴンドラ船が描かれている。

これらの構図の特徴は、連続三角文や蕨手文などの抽象的な文様と、人物像のような具体的なものを巧みに配していることである。連続三角文は、へびなどのウロコを魔除けとして象徴化したと考えられ、大きさや色彩構成がそれぞれ異なる4つの同心円文については、同心円文＝太陽の象徴化と考えると、全体で四季の時空を表現している様にもとれる。そして何よりも船団や倒された人物などの表現は、被葬者の波乱に満ちた「叙事詩」をうたい上げているのではと想像することもでき興味深い。

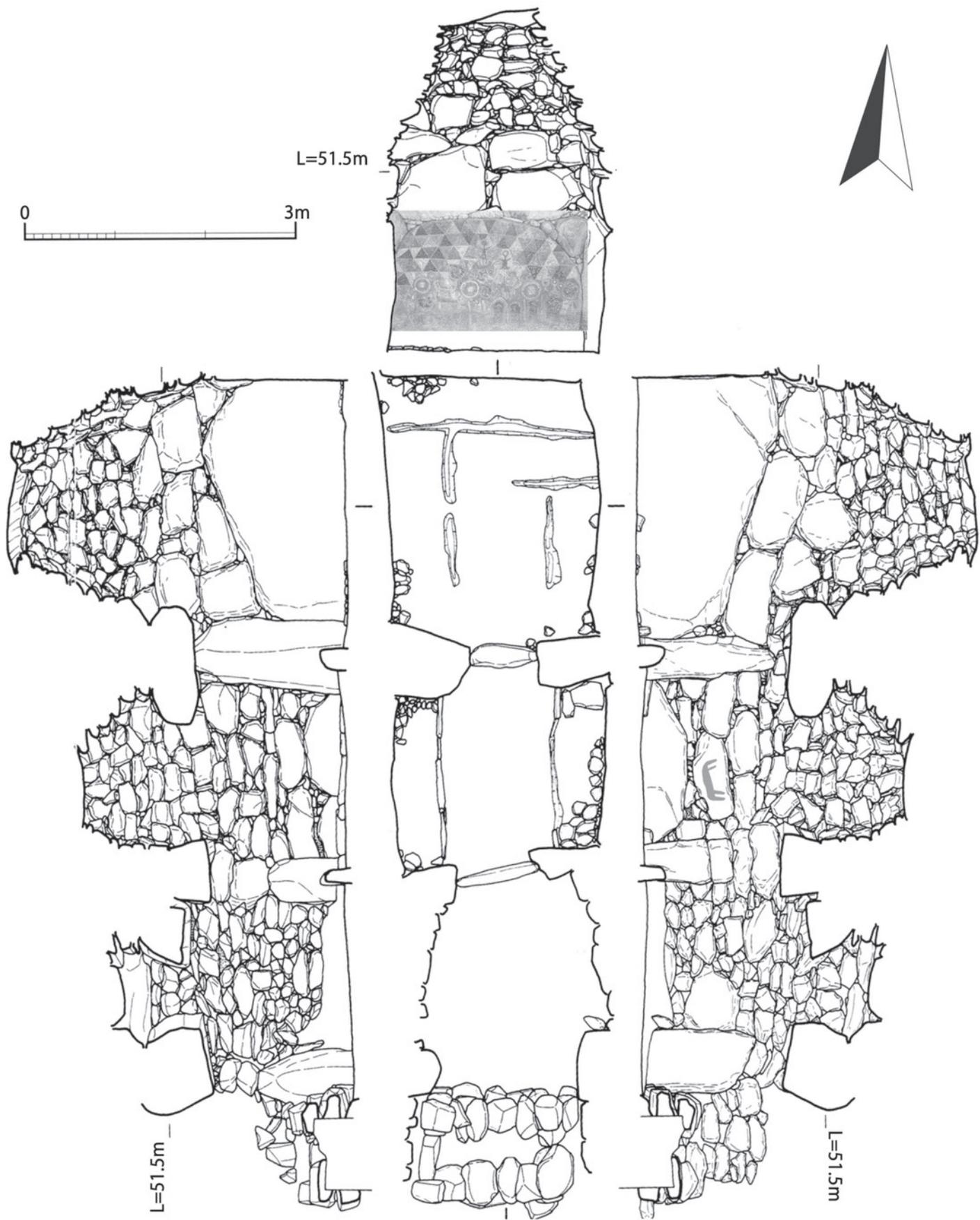


图3 田代太田古墳石室実測图 (1/60)

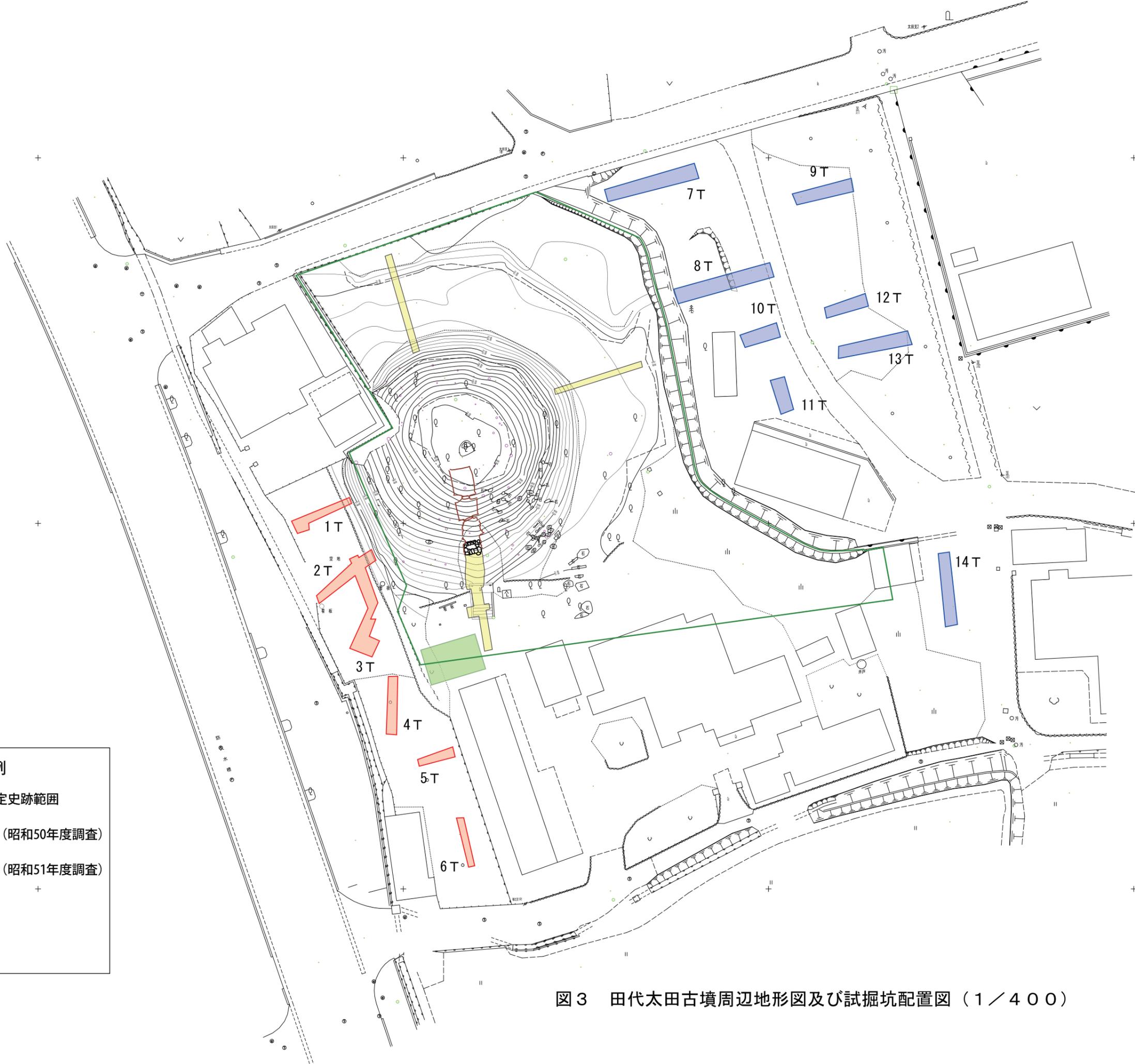
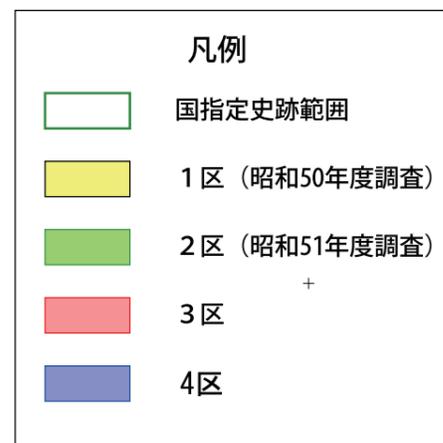


図3 田代太田古墳周辺地形図及び試掘坑配置図 (1/400)

第3章 調査の報告

1. 調査の概要

今回の範囲確認調査は、大きく史跡指定地の西側及び東側の2地区に分けて実施した。現史跡指定地周辺、とくに隣接地を対象とし、作業員及びバックホーにより幅1～2m、長さ1～2mのトレンチ（試掘溝）を計14ヶ所設定して、古墳墳丘外部施設等の有無と規模を把握する確認調査を実施した。

調査地区については、昭和50・51年度に石室の保存工事に伴って実施された調査地区をそれぞれ1区、2区とし、今回確認調査を実施した史跡西側の調査地区を3区、東側の調査地区を4区とした。

また、史跡とその周囲の現状地形測量図（1/200）を作成するとともに、将来の調査等に備える目的で史跡内に測量基準点を設置した。

2. 3区の調査

史跡指定地の西側部分の現況は雑種地であるが、もとは民家や農作業小屋が存在していた。この部分は古墳の平面形態の状況から、墳丘の一部が含まれていることが確実であるため、墳丘基底面の残存状況の確認とその規模の把握、さらには周溝の有無の確認を主眼として、6本のトレンチを設定した。トレンチの設定位置は、No.1～4トレンチについては、推定される墳丘中心部から放射状に設定した。また、No.2とNo.3トレンチの間に両トレンチの埋め戻し後にサブトレンチを設定した。

調査の結果、この調査区はほぼ全面にわたって近現代の攪乱を受けており、明確な遺構を検出することはできなかった。ただ、No.2トレンチの西端部から確認した落ち込みについては、検出位置が墳丘の想定ライン上にほぼ載ることから、この部分が墳丘第1段の上端部に当たる可能性が高いようである。しかし、この落ち込みの下部は近現代の攪乱によって原形をとどめておらず、古墳の平面的規模を確定できるような明確な周溝の痕跡としては確認できなかった。

また、No.1、2およびNo.3、4トレンチで検出した地山面の高低差に1m程度の差があることが確認できた。この高いところは墳丘基底部である可能性が高く、この場合、不明瞭ながらいわゆる地山削りだしによって整形された墳丘基底部を面的に検出できたことになる。

出土遺物は、近～現代の溝や土坑から出土したビニールやプラスチックが混ざった瓦や陶磁器など現代のものが大半で、古墳と同時期の遺物としては、No.3トレンチから出土した円筒埴輪（図6、図版14）

表1 3区試掘坑一覧

トレンチNo.	掘削面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	地山検出面標高 (m)	地山検出深度 (m)	備考
1	9.1	6.2	49.5	0.4	現代溝・小穴検出
2	11.9	9.7	49.7	0.4	西端で落ち込み検出
3	13.1	11.3	48.6	1.2～1.4	円筒埴輪片出土
3 サブトレンチ	3.2	2.6	49.7	0.4	近現代土坑（肥溜か）検出
4	7.8	5.6	48.6	1.4	
5	5.4	3.6	49.1	0.9	近現代溝跡検出
6	16.2	11.7	48.5	0.9	近現代溝跡検出

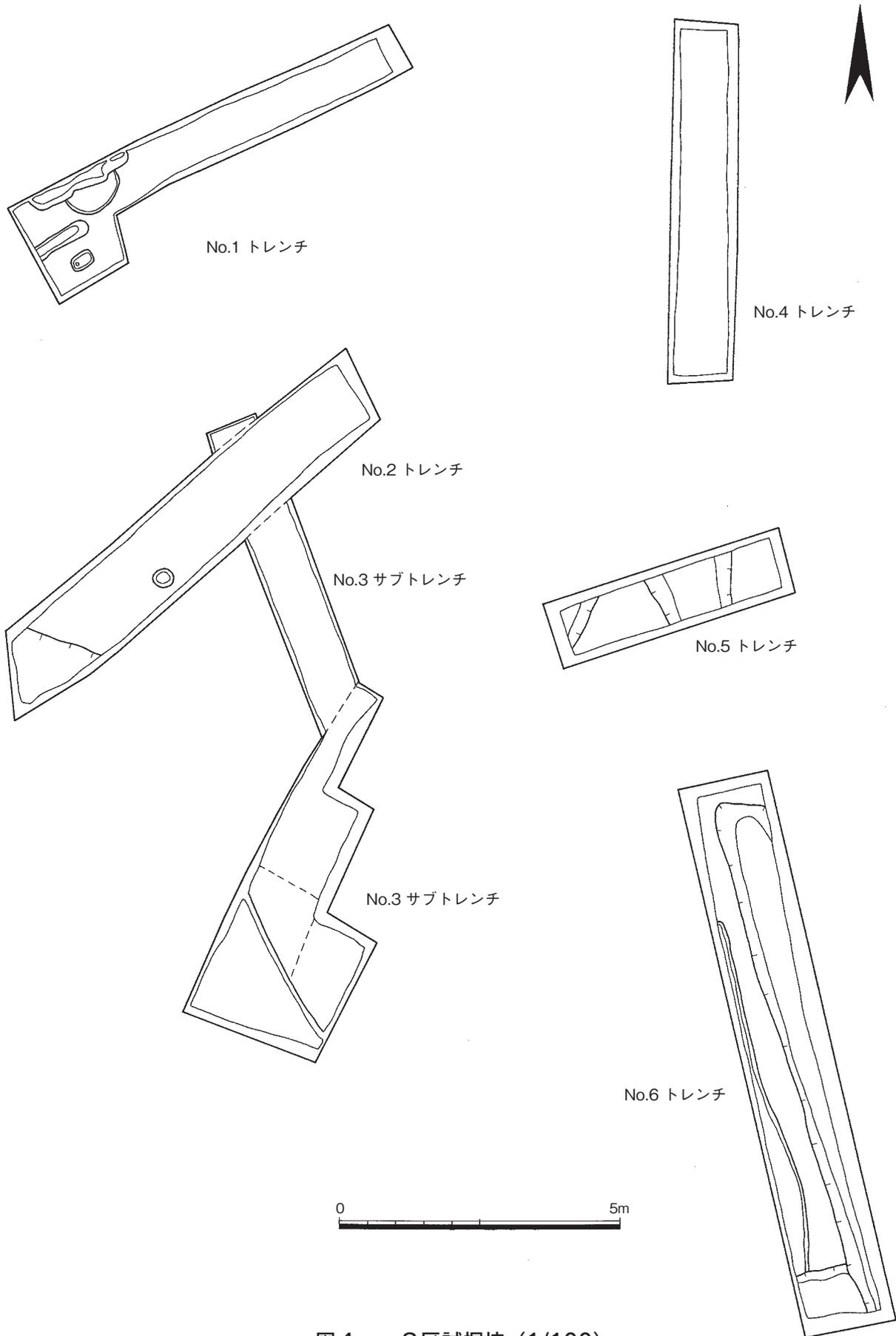
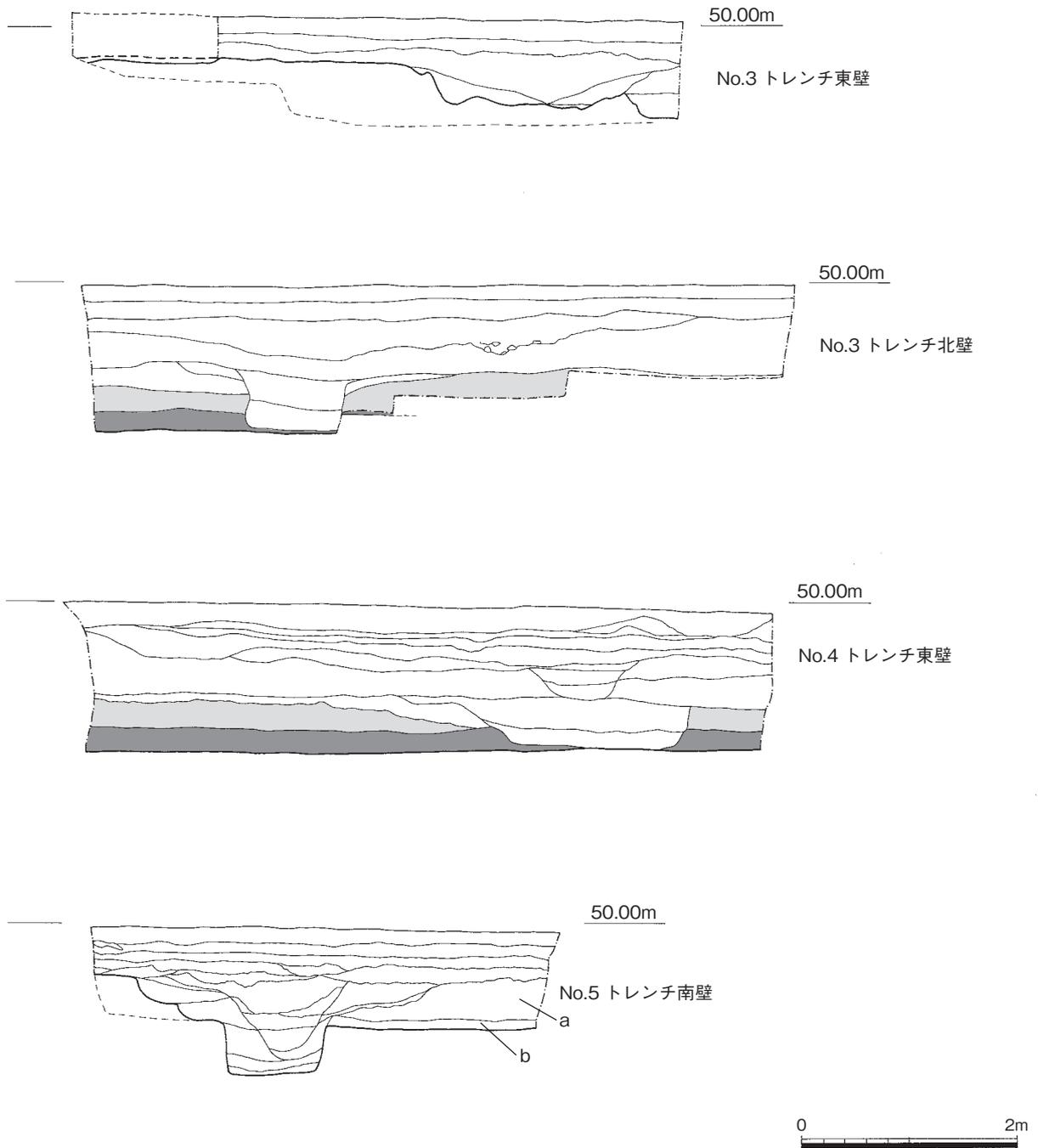


図4 3区試掘坑 (1/100)



- 淡灰褐色土
- 黄褐色粘土（灰黒色粘土・層状ブロック混）
- a 暗褐色粘質土
- b 暗褐色粘質土+黄灰色粘土
- 地山：黄灰色粘土
- （無表記の土層は近～現代の溝・土坑の埋土あるいは現代の客土）

図5 3区試掘坑土層図（1/60）

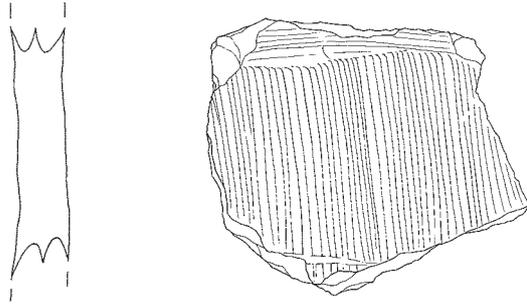


図6 3区出土埴輪片 (1/2)



の破片がわずかに1点したのみである。突帯の下部が残る胴部片で、外面調整はタテハケで突帯接合部はヨコナデ、内面ナデ仕上げ。いわゆる川西編年の5期に相当する。破片1点のみの出土であり、墳丘原位置との関係は不明確である。

3. 4区の調査

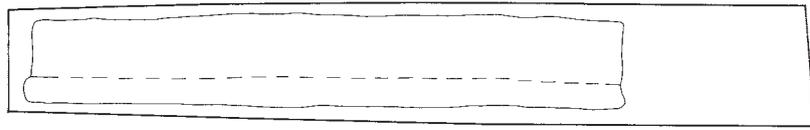
史跡東側の調査地区については、8本のトレンチを設定した。トレンチの配置は、No.14トレンチ以外は基本的に東西方向とし、No.10およびNo.12トレンチについては、1区の調査（墳丘盛土内トレンチ）の延長線上になる位置に設定した。調査地の現況は平坦な雑種地で、造園業者により庭木の仮植場や造園資材の仮置場として利用されている。なお、史跡際は倉庫が建てられているほか、楠の大木が生い茂っており、史跡の境界に近いところからトレンチが設定できたのはNo.7・8トレンチの2本だけである。

調査の結果、墳丘外部施設など古墳に関わるものも含め、遺構・遺物は確認されなかった。調査地区の基本層序（図版10-2参照）は、地山検出深度がもっとも深かったNo.7トレンチで、客土（黒褐色土・約0.8~1m）、黄灰色土（約0.9m）が堆積し、地山（淡黄灰色土）となる。なお、No.7からNo.13トレンチの地山検出面の標高は46.1~46.5mで、原地形も現況と同様に平坦地であったようである。

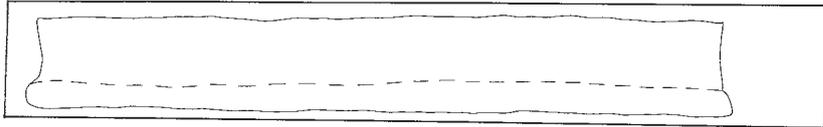
遺物は全く出土していないが、No.7・8トレンチ間の客土中からコンテナ1箱分もの円筒埴輪片を表面採集した。これについては地権者の話から、調査地区の東に隣接する岡寺古墳から客土にすべく土を持ち出した際に混入したもののようである。切株の根の間に挟まったような形で出土しているが、以前の確認調査で埴輪が大量に出土した岡寺古墳の前方部北側埴裾部分から木根ごと土を搬出した際に付着してきたものと考えられる。

表2 4区試掘坑一覧

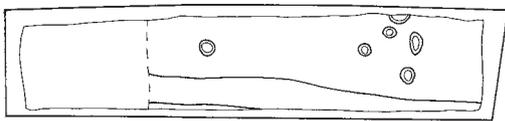
トレンチNo.	掘削面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	地山検出面標高 (m)	地山検出深度 (m)	備考
7	16.8	10.9	46.1	1.8	両トレンチのほぼ中間の客土中から円筒埴輪が出土
8	17.3	12.2	46.2	1.7	
9	9.9	7.3	46.4	0.6~1.3	現代溝・小穴検出
10	6.1	4.2	46.2	1.5	
11	6.8	4.6	46.2	1.5	
12	6.6	5.1	46.4	1.3	
13	12.8	9.2	46.5	1.2	
14	9.3	6.8	45.9	0.9	現代攪乱土坑あり



No.7 トレンチ



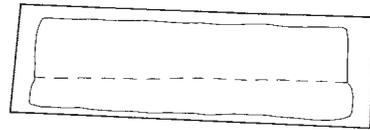
No.8 トレンチ



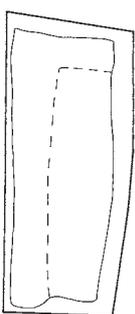
No.9 トレンチ



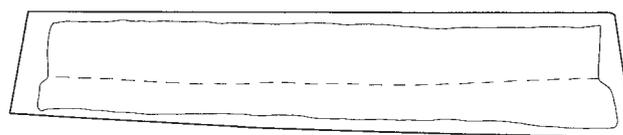
No.10 トレンチ



No.12 トレンチ



No.11 トレンチ



No.13 トレンチ



No.14 トレンチ



図7 4区試掘坑 (1/100)

第4章 まとめ

今回の調査では調査地区の範囲に限界があり、十分な成果を得たとは言い難い結果となった。今後は墳丘盛土を含めた史跡内について確認調査を実施していく必要がある。

以下、今回の確認調査で判明したことについて個条式に述べ、まとめとしたい。

1. 今回の確認調査の重要な目的の1つに周溝の存在の有無を確認することがあったが、周溝が現在の市道にまで広がると仮定しても、推定ライン上に設定したNo.2とNo.3トレンチにその痕跡が見つからない。これは後世の攪乱で周溝が大きく損なわれていたとしても不可解である。
2. 周溝の有無は確認できなかったが、No.1・2及びNo.3サブトレンチで検出した墳丘基底面と、その外部（No.3・4トレンチ）との間に段落ちがあることが判明した。すなわち、墳丘基底面と推測されるNo.1・2トレンチの地山検出標高が49.7m前後、一方No.3・4トレンチで検出したそれは48.6m前後で、これは以前の調査で検出された墓道の底部とほぼ同じであることを確認した。したがって、墳丘の少なくとも前（南）面から東側にかけては、約1.2m前後の掘り込み（段落ち）が存在するものと推定される。
3. この段落ちの性格については、1次調査の報告書（保存科学研究会 1976「田代太田古墳 調査及び保存工事報告書」鳥栖市教育委員会 P.35）で、「墓道の右側壁が、東へ外湾する地点より起る床面の落ち込みは、2次調査（2区）の遺構Ⅱとほぼ同位置であり、この付近より周溝もしくは、封土の黄色土を掘りあげた跡が存在する可能性が高い。（中略）封土に用いられた黄色土の量は多く、もし特定区域より採取されれば、周溝状の跡を示すと考えられる。」と予察されているように、墳丘盛土を確保するために地山を掘り下げているとともに、平面円形に墳丘第1段の墳裾を削りだし整形している蓋然性が高くなった。
4. 周溝埋土に特徴的な黒褐色系の腐葉土の堆積が痕跡すら見出されていないことから、今回の調査結果だけで判断すれば、地山削りだし整形で段を造るのみで周溝が存在しない可能性も指摘できる。なお、地山（黄灰色粘質土）の上に黄褐色粘土（灰黒色粘土及び同層状ブロック混入）と淡灰褐色土がそれぞれ20～30cmの厚さで堆積しているが（図5参照）、この2層が地山削りだし整形後に堆積した層であることが推測できる。
5. いずれにせよ、地山削りだし上端ラインが墳丘第1段端部であると仮定した場合、墳丘の平面的規模が径約42mとする従来の考証が今回の確認調査でも立証できたことになる。
6. 墳丘外部施設の重要な構成要素である円筒埴輪は、No.3トレンチで僅か1点の小破片が出土したのみであるが、過去の調査で羨道部付近の封土から小破片が3点検出されていることもあり、本古墳に円筒埴輪列が存在することがほぼ確実となった。
7. 史跡東側については、今回の確認調査は構造物や樹木により試掘溝の設定が制限されてはいるが、現史跡境界線以東には墳丘外部施設が広がる公算は少ない。周辺の地形や昭和20年代の空中写真などから、原地形は東に位置する岡寺古墳との間に南北に細い谷が入っていたようである。

写真図版

1. 墳丘南東部現況（東南から）



2. 墳丘東部現況（北東から）



3. 墳丘北西部現況（北から）



図版 2



1. 墳丘北側平坦部分（西から）



2. 墳丘東側平坦部分（東から）



3. 墳丘北側平坦部分（北から）



1. 墳丘北西部現況（北西から）



2. 墳丘西側現況（西から）

図版 4



1. No.1 トレンチ (東から)



2. No.2 トレンチ (北から)



3. 同 (南西から)

1. 同 落ち込み部分 (北から)



2. 同



3. 同 (南西から)



図版 6



1. No.3 トレンチ (北東から)



2. 同 (南西から)



3. 同 (北東から)



1. 同 (北から)



2. 同 (西から)



3. 同 サブトレンチ (南西から)

図版 8



1. No.4 トレンチ (北東から)



2. 同 (北から)



3. No.5 トレンチ (西から)



1. 同 南壁土層 (北東から)



2. No.6 トレンチ (南から)

図版 10



1. No.7 トレンチ (東から)



2. 同 西壁土層 (東から)



1. No.8 トレンチ (東から)



2. No.9 トレンチ (南西から)

図版 12



1. 同 北壁土層 (南から)



2. No.10 トレンチ (南東から)



3. 同 西壁土層 (東から)



1. No.11 トレンチ (北から)



2. 同 (南から)



3. No.12 トレンチ (西から)

図版 14



1. No.13 トレンチ (西から)



2. No.14 トレンチ (北東から)



3. No. 3 トレンチ出土円筒埴輪



鳥栖市文化財報告書第 81 集

田代太田古墳

史跡周辺の範囲確認調査

平成 22 年 3 月 26 日 印刷

平成 22 年 3 月 30 日 発行

編集・発行 鳥栖市教育委員会
鳥栖市宿町 1118 番地

印刷 三橋印刷株式会社
鳥栖市蔵上 4 丁目 152 番地